

審査の結果の要旨

氏名 嶋田英晴

本論文は、中世イスラーム社会にあって、少数宗教集団であるユダヤ教徒が諸王朝の興亡の中でいかなる生存態様を示したかを考察したもので、歴史学を基礎としつつ、ユダヤ教がその歴史的経験の中で「生き残り戦略」を培ったという理解の下で、その戦略が実践されたという仮説を実証する試みである。通常歴史研究では、資料的制約などの理由で少数集団をそれ独自に把握するのは困難を伴うが、本論において嶋田氏は、A・トインビーのいう文明としての「ユダヤ・モデル」、およびS・ゴイテインのゲニザ文書研究の成果である「一つの地中海社会」という認識モデルに依拠して、同族意識に基づいた文化的商業的ネットワークによって危機を乗り越える生存形態を想定し、そうした生存形態は「残りの者」に希望を託す聖書的信念を基礎にしてユダヤ教社会が築き上げたものであり、その実践の成果として中世イスラーム社会におけるユダヤ教徒の生存様式を描写しようとした。

論文は全5章で構成され、冒頭で上記二人の碩学の歴史構想を紹介し本論文の研究目的を提示したのち、第1章で、捕囚期以降のバビロニアにおけるラビ・ユダヤ教中央集権体制を分析し、公式のユダヤ共同体代表のほかに、ジャフバズ（宮廷商人）としてのユダヤ人有力者の存在があったことに着目し、第2章では、スペインと北アフリカで台頭した新興イスラーム勢力下において、ユダヤ商人が海上貿易による緊密なネットワーク形成を行ったことをゲニザ文書から実証し、そこに二種類の協同事業があったことを示す。第3章では、ファーティマ朝がカイロ市を建設して新たな商業圏が形成されるに伴って、ユダヤ商人が移住し宮廷に進出する経緯が紹介され、第4章では、主要な商業通信網を形成した4つの有力ユダヤ商人の家系とその相互関係を論じる。第5章では、迫害に遭遇したイエメンのユダヤ教徒の求めに応じて、カイロ在住のマイモニデスが回答した書簡を分析し、迫害の原因と対応に理論的根拠を示し迫害に耐えるよう勇気づけた次第が分析される。

本論文は、ユダヤ教徒の社会をラビ・ユダヤ教的な視点のみならず経済的ネットワークという複合的視点を導入することで、各地の諸王朝の興亡に翻弄されながらも、商業通信網の維持と宗教権威との密接な関係の保持等の方法によって、地域相互の連携と互助制度を動員して危機を凌ぐユダヤ教徒の生存形態が説得的に論じられた。これによって、ユダヤ教共同体という概念に複合的視点が導入されたことの意義は大きく、イスラーム統治下で、いわばユダヤ教のウンマという枠組を考察する際の新たな問題提起がなされた。

本論文には、ホスト社会であるイスラームに関する知識に不正確さがあることや、二つの協同事業の分析に甘さがある点、論文の中心部分が資料の翻訳に依存する点、また生き残り戦略を普遍的概念として提示する意図がありながらも、記述の仕方があたかもユダヤ教にのみ特有の価値観の提示と見られかねない点など改善すべき事柄が認められるが、少数集団の歴史研究に一つの重要な視座を提示しえた本論文は、この分野における重要な貢献であり、本委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。